

金貨一枚貸したら

辺境伯様に捕まりました!?

登場人物紹介

CHARACTERS

ミュスカ

孤児院出身で、教会の物置小屋に居候している聖女。貴族の聖女たちから仕事を押し付けられながらも日々前向きに暮らしている。

レスター・ヴォルフガング

雪の街・スノーブルグを治めるヴォルフガング辺境伯。世間では「冷酷」と噂されているが、ミュスカには甘々。

シャーロット

コンスタンの教会に所属する伯爵令嬢の聖女。レスターに想いを寄せている。

スペンサー

ヴォルフガング邸の家政婦長。邸の古株で、幼い頃からレスターを見守ってきた。

デイビッド

聖堂騎士団の騎士。思い込みが激しく、想いが空回りすることも。

大聖女

すべての聖女の頂点。年齢不詳……？

ヴォルフガング邸の使用人たち

アラン … ナイスミドルな執事。
ケント … 観察力の鋭い、優秀な従者。
アンナ … お化粧と髪結いが得意なメイド。
リード … 気が利く、優しい御者。

スノーブルグの教会の神父たち

ジェスター … 教会に住み込んでいる。穏やか。
ハリー … 元聖堂騎士で、活発。
レイフ … モノクルをかけていて、物静か。

孤児院にいた私が、教会に聖女として引き取られて数年。

コンスタンの街の孤児院の前に捨てられていた赤ん坊。両親が生きているのかどうかもわからない。誰が名前を付けたのか、ミウスカと呼ばれていた。それが私。

幼い頃から自然と癒しの術が使えていて、よく孤児院のみんなの擦り傷を治していた。

他にも、庭の小さな畑に植えられていた芋の苗に「大きくなりますように」と祈れば普通よりも育ちが良くなったりと、私には不思議な力があつたようで……

それをいつも見ていた院長が「ミウスカは聖女かもしれない」と言い出した。

聖女の認定をすることができたのはただ一人、大聖女様だけ。

各地に幾人もいる聖女たち。その上には大聖女候補である筆頭聖女が何人もいて、そのすべての頂点である大聖女様だけが聖女の認定をするのだ。

孤児院長の推薦を受けた私も大聖女様に認定されて聖女の一人となった。

聖女になれば、教会で務めを果たさなければならぬ。

魔物が人里に害を為さないように街の外には結界を張り、人々には癒しを与える。聖女は国や

人々のために祈りを捧げるのだ。

そんな聖女となった私は、すでに十九歳になっていた。

この国では、聖女は貴族と結婚することが多い。聖女の力は遺伝するのか、現在いる聖女のほとんどが貴族だった。

たまに血筋とは関係なく平民の聖女もいて、私もその一人。しかも私は孤児だった。平民孤児の私には姓もなく、ただのミウスカだ。

貴族の聖女たちは通いでやって来るが、私は身寄りがなかったために教会の物置小屋を借りて住んでいた。

それでも家賃は納めなければならず、毎月の聖女の務めでもらえる少ないお給料から天引きされる。食費も必要だから、手元にお金はほとんど残らないが、それでもコツコツとお金を貯めるようにしている。

身寄りのない私では結婚できるとも思えないし、もし聖女の力が急になくなったりしたら？ 病気で務めが果たせなくなったら？

何があっても生きていけるように、自分で将来の心配をしないといけないと思つてのことだった。

◇

今日はどしや降りの雨だった。

雨は憂鬱^{ゆううつ}になるという人も多いが、今日の私は違う。

毎日コツコツ貯めた小銭がやつと金貨一枚分になり、初めて金貨に交換してきたのだ。

そのうえ、少し残ったお金で初めて自分で傘を買うこともできたので、ちよつとした浮かれ気分が教会への帰り道を歩く。

大事に握りしめた一枚の金貨に「フッフ」と変な声が低く漏れると同時に、思わずにやけてしまう。

水色の、手入れされていない伸びた髪が少しだけはねていたけど、そんなことなど気にならない。軽い足取りで教会の前までたどり着くと、雨のせいか今日は人も少ないのに一人の男性が佇^{たぎ}んでいるのを発見した。

男性は、雨に負けず劣らずどんよりとした雰囲気。眉間にシワが寄った険しい表情で、ちょっと近付きにくい。私の今の気分とは雲泥^{うんでい}の差だった。

でも、困っているならやはり声をかけるべきか。もしかしたら、聖女に仕事を頼みに来たのかもれないし。

私は聖女なんだから……と自分に言い聞かせて暗く淀^{もど}んでいる男性にそつと声をかけた。

「あの、何かお困りですか？ 教会にご用でしたらご案内致しましょうか？」

「いや、用事は済んだが……。雨に降られてどうしようかと……」

「教会で雨宿りしますか？」

「……それはいい」

雨宿りしていくか尋ねると、さらに表情を暗くして顔を引きつらせる。

教会の中に入るのを凄く嫌がっているように見えるが、家に帰れないのも困るだろう。

そう思うと、初めての傘を握りしめていた手に力が入る。よしと決意して彼に傘を差し出した。「良ければ私の傘をどうぞ」

買ったばかりの傘だけでしょうがない。きつと来る時は雨が降っていなかったから、傘がないんだ。

私も、金貨を交換してから急に雨に降られ、浮かれた気分のまま初めて傘を買ったから。

彼は、初対面の私に傘を差し出されて驚いている。

「……君が帰るのに困るだろう？」

「私は、教会に住んでいますからもう大丈夫です。お家は近くですか？」

近いなら後日返して貰えばいい。

「いや、近くはない。馬車乗り場に行こうと思ったのだが……教会で金をすべて使ってしまったて……」

「ええ!? 帰りはどうするのですか!？」

教会でお金をすべて使ったという発言に驚き、つい男性の話を遮ってしまった。

そのタイミングで、グウ、と男性の腹が鳴る。

「……す、すまん……! 急いで来たものだから、まだ昼も食べていなくて……」

男性は恥ずかしさでいっぱいになったように頬を赤らめ、顔を隠すように片手で押さえて横を向いてしまった。

なんだか、心配になってきた。この人、行き倒れにでもなったらどうしよう……

そう思い、今度は手の中の金貨をぎゅっと握りしめた。

「……良ければこれもどうぞ。馬車代も足りると思いますし、お昼ご飯も買えますよ」傘を買ってしまったから、今渡せるお金はこの金貨一枚しかない。

自分の小屋まで行けば小銭ならあるが、もし足りなかったら申し訳ない。

教会で雨が止むまで待ってもらうのが一番いいのだが、教会に入りたがらないのだから無理だろうなあ、と思ってしまう。金貨を差し出した私に、男性は慌てた。

「そこまでしてもらうのは申し訳ない! ダメだ!」

「帰れないとお家の方が心配しますよ?」

「しかし……!」

「……雨も降っていますし、帰りが安全になるように特別に『聖女の加護』もつけてあげますね」なかなか受け取らない男性の手を取り、半ば無理矢理金貨をその手のひらに載せた。

受け取った金貨を呆然と見ている男性の前で両手を握り、祈る。

彼の旅が安全なものになるようにと、『聖女の加護』を男性に付与する。

『聖女の加護』とは、聖女の能力の一つだ。悪いものから守ってくれると寝物語で伝えられてきた。

この付与術をかけられた人は、その聖なる力のおかげで魔物を避けられるのだ。

昔は一人一人に付与していたが、それでは対応しきれなかったのだろう。アミュレットに付与することが広まり、今では教会で普通に売られている。

お守りとして旅人に人気で、人里離れた場所に行く時に買ってくれる人も多い。私が聖女として活動し始めた時にはもうアミュレットが主流になっていたから、直接人に加護を付与することはめったにないが、今日は気分がいいから特別だ。

『聖女の加護』を付与された男性を包むように、一瞬キラキラと周りが光る。雪のように降っては消えていく白い光を、男性は言葉なく見つめていた。

「……君は聖女か？」

「はい。これで安全に帰れますよ。特別ですから、秘密にして下さいね」

ほんの少し笑みをこぼす私に、男性は呆然と、しかし真つすぐに視線を向けている。本当なら『聖女の加護』の付与にはお金がかかるから、気にしたのかもしれない。

最初に見かけた眉間のシワはないが、よくわからない方だ。

「では、私は聖女の務めがありますから失礼しますね。お氣をつけてお帰り下さい」

そうにこやかに言つて踵^{かかと}を返すと、小さく拳を握りしめて「いつか金貨を返しに来て下さいね！」と密かに力いっぱいに願う。

男性の視線を背中に感じながら、私は雨に濡れないよう小走りで教会へと戻った。



金貨一枚を男性に渡してからもう三日。

家が近くじゃないと言っていたから、返しに来られないのだろうか。

それとも、返す気がなかったのだろうか。

しかめっ面に氣を取られていたけど、よくよく思い返すと彼は上等な格好をしていた。金貨一枚程度、すぐに返してくれそうだと思っていたのに。

借りたお金を返さないような方には見えなかったけど、人は見かけによらないと言うし……

金貨を渡した男性に想いを馳^はせながら、目の前のなんの変哲もない木の机に向き合う。その上には、『聖女の加護』を付けるための小さな特殊な石のついたアミュレットが山のように積んである。

これも、聖女の務めの一つだ。この小さな石に『聖女の加護』を付与し、加護付きのアミュレットとして売るのが。人々のお守りとして流通していて、教会の資金源の一つにもなっている。

たくさん積んであるのは、他の聖女の分も押し付けられているからだ。

おかげで朝からアミュレット作りで手いっぱいだった。

まあ、押し付けられるのはいつものことで、それでもなんとか毎日のノルマはこなしている。なんだかんだ私がやり切ってしまうから、他の聖女たちは罪悪感すら抱いていないだろう。

教会の神父様たちも、貴族の聖女たちの家からの寄付金が大事だから見て見ぬふりをしている。

寄付金どころか、扱いに文句を言う実家すらない平民孤児の私の立場は低いのだ。

机の上のアミュレットに手をかざすと、清らかな光がほんの数秒だけアミュレットを煌めかせる。一つ一つにそんなに時間はかからないが、これだけの量をこなすにはてきばきと進めなければならぬ。

しかも今日は、他の聖女たちがいつもよりめかし込んで朝から大騒ぎだ。

三日前の雨の日に大事なお客様が来たようで、その日からみんな「次いらっしゃったら対応は私が！」と騒いでいたのだが、その方が今日また来訪されるみたいだった。

普段なら癒しを求めてやって来る人たちの対応も全部私に押し付けるのに、今回は彼女たちで取り合いをしているみたいだ。

だから、私は朝からずっとこの小さな部屋で、アミュレットに『聖女の加護』をひたすら付与し続けている。

いつもはこんな朝から来ないシャーロット様まで早めに教会にやって来て、「今日も気合いをいれて縦ロールを決めて来ましたわ！」とソワソワしていた。

代々聖女の家系である伯爵令嬢のシャーロット・バクスター様は、この教会所属の聖女の中で一番身分が高い。ご両親も、娘を大事にしているようだった。

そんな彼女は、質素な私と違ってお洒落な方で、見事な金髪の縦ロールがトレードマーク。そのシャーロット様が気合いをいれた縦ロールとは。いつもよりも巻きが激しいのだろうか？

こんなにも騒ぎになっていると、一体誰が来るのか、さすがに少しは気になってくるが、私に知

らされることはない。

少し残念だが、みんな興奮して声が大きくなっているから、なんとなくは聞こえてくる。

待ちきれない聖女たちは、客人が来ればすぐにわかるように廊下で待機していた。賑やかな会話はこの部屋に筒抜けのため、私は耳をそばだてる。

「みんな！ 家紋入りの馬車が到着したわ！ あの家紋は間違いないわ!!」

廊下を走る音とともに誰かがそう叫ぶと、聖女たちの黄色い声が響いた。

「きゃあ！ レスター様よ！」

「お顔だけでも！」

どうやらお客様はレスター様という方で、お顔が素敵らしい。

そう言えば、金貨一枚を渡した方もなかなか綺麗な顔立ちだった。

無事に帰れたかしら……。お風邪は引かなかったかしら……

そんな心配をよそに、さらにアミュレットに『聖女の加護』を付けて、押し付けられた分も含めて一日のノルマをこなしていく。

廊下は、黄色い声が溢れそうなほどさらに騒がしくなっていた。憧れの方に会えることに舞い上がっているのが、扉一枚隔てていてもわかる。

「お茶は絶対に私が持つて行くわ！」

「いえ、私がぜひ！」

お茶を淹れたことのないシャーロット様までもがお茶を持つて行こうとしている。お茶汲みさえ

聖女たちの争奪戦になるなんて、初めてのような気がする。

結局、お茶汲み争奪戦はシャーロット様の圧勝だった。身分が一番上のシャーロット様には誰もかなわなかったようだ。

いつも雑用は私に丸投げで、優雅にお茶をしていた貴族の聖女たちが進んでお茶汲みをしようとしたことに少し驚いてしまう。神父様たちも、寄付金の多い貴族の聖女たちには優しく、無理に仕事をさせることもなかったのだ。

その神父様が、廊下で騒いでいた聖女たちを呼びに来た。

「ヴォルフガング辺境伯様が聖女を連れて帰りたいと仰おしやっている。みな、集まりなさい」

この部屋には入ってこないということは、私はお呼びではないのだろう。いつものことだと気にすることなく、私は静かになった部屋でアミュレットのノルマをさらに淡々とこなしていった。

しばらくすると、神父様が慌ただしく私を呼びに来た。勢いよく開いた扉にびくりと驚き手が止まる。

「ミユスカ！　すぐに来なさい！」

必死の形相の神父様だけど、私は理由がわからずに首をかしげる。それでも、素直に返事をしてついて行く。

アミュレットへの付与が終われば掃除があるし、昼からは街の外に結界も張りに行かないといけないのに……

一日の仕事を頭に想い浮かべながら、落ち着きのない神父様の後を追うと、教会の広い部屋に連れて行かれる。「入りなさい」と言われて逆らう理由もなく、「はい」と頷いて入った。

部屋に入ると聖女たちが壁一列に並び、不快感もあらわに私を見ている。

どういう状況なのだろう？　訳がわからず困惑する。

部屋の中央の豪華な椅子には男性が一人。長い足を強調するように組んで座っており、後ろには従者らしき人が控えている。

その部屋の中央に座っている男性に私は見覚えがあった。

——金貨を渡した方だ。

男性は、雨の日の険しい顔からは意外なほどの素敵な笑顔で立ち上がる。

あの日もそうだったが、艶えびのある黒髪に切れ長の男らしい眼。スラリとした高身長にその端整たんせいな顔が乗っている。礼服という訳ではないのに、この方が身にまといているだけで絵になるぐらい口ングコートが似合う。

その方が、金貨一枚をわざわざ返しに来てくれたのかと思うと、ちょっと嬉しくなった。それと同時に、この部屋の雰囲気が理解できなくて首をかしげる。

明らかにこの部屋の中でこの男性が一番偉く見えるのだが……？

「ああ……この娘だ。この水色の髪の可愛い娘だ」

待たかねた想いを漏らすように言葉を吐いた彼は、迷いなく私の前まで近付いてきた。しかも可愛いとは!?　いきなり幻聴が聞こえた。

私はこの状況に困惑し、言葉に詰まったままで肩を竦めて立ち尽くすしかない。

「あ、あの……」

「名前はミュスカと聞いた。間違いないか？」

「は、はい。ミュスカです！ ……姓はありません」

平民孤児の私に姓などない。いかにも高位の貴族らしいこの方にそう告げるのは気が引けて少々口ごもるが、そんなことはおかまいなしとばかりに彼は私から目を離さない。

「俺はレスターと言う。早速で悪いが、君を連れて帰りたい」

「は？」

思わず素っ頓狂な声が出てしまった。

口が少し開いたままの私に、レスターと名乗った目の前の男性はひたすら柔らかい笑顔を向けてきて眩しかった。顔が良すぎる。

聖女たちが騒いでいたのは、この端整な顔のせいだと納得してしまう。

そして今、何と言いました！？

目を丸くして呆然としていると、神父様が私の困惑顔に呆れて説明をしてくれた。

「ミュスカ、レスター様は聖女を必要とされている。聖女に仕事を頼みに来たのだ」

ああ、だからみんな自分が行きたがったのか……

「本当に私が行っていいのですか？」と言いたくなるほどに、壁に一列に並ぶ聖女たちからは「断れ！」という無言の圧力を感じる。

「すぐに来てくれるね？ 荷造りを手伝おう。部屋はどこだ？ 教会に住んでいると言っていただろう？」

「えっ……？ でも……」

「君の荷物を運ぶために今日は馬車を三台準備してきた。足りなければすぐに追加で手配しよう」

「は……!？」

急な展開に訳がわからず戸惑う私をよそに、レスター様は迷わずに私の腰に手を回すと、そのまま部屋の外に連れ出した。

金貨一枚を受け取るのを遠慮していた時とは違い、意外と強引だ。

「部屋はどこだ？」

「えっ？ あの……裏庭に……」

「では、案内をしてくれるか？」

「は、はい……」

なぜか凄く嬉しそうに満面の笑みで見つめてくるこの方は何なのでしょう。疑問しかない。怪しいとさえ思える。

そして、言われたままに案内している私って大丈夫？

いつも仕事を当然のように押し付けられているせいか、断るという行為ができず、素直に案内してしまう自分がわからない。

「ミュスカ。君をミュスカと呼び捨てにしていいいか？」



「は、はい。あの、あなたのお名前は？」

「レスターだと言っただろう？」

いや、お貴族様ですよ？ いきなり名前を呼べと？
姓は!?

私みたいに姓がないとは思えない！

「あの……姓は？」

「ただのレスターではダメか？」

「……………!？」

ただのレスターって何ですか!?

黙り込んでしまった私に、レスター様は困らせたくはないというようにやっとフルネームで名乗ってくれた。

「……ヴォルフガングだ。レスター・ヴォルフガング。だが、レスターと呼んで欲しい」

「……ヴォルフガング様？」

「レスターだ」

ヴォルフガング様とお呼びしたら、私の腰に回している手に力が入った。
一度立ち止まり、不服そうに私の顔を見つめてくる。

どうやら、どうしても名前——レスター様と呼んで欲しいらしい。

「……レスター様？」

「呼び捨てでもいいんだが……」

「それは……ちよつと無理です……」

「そうか……では今は我慢しよう」

我慢って何ですか？ 今はって何ですか？

一生呼び捨てになんかできないですよ!?

そんな疑問をよそに、レスター様はまた歩き出した。

しかし、腰に回している手は離れない。

チャリとレスター様を見上げると、また笑顔をこちらに向けていて、しかもぼつちり目が合ってしまった。

またしても思う。顔が良すぎる！

恥ずかしさから勢いよく目を逸らすように下を向くと、レスター様はクスツと笑う。

「どうした？ ミュスカ」

「す、少し離れて下さるとっ……」

レスター様は私が恥ずかしがっていることが絶対にわかつている気がする。

男性のこんな甘い対応に慣れない私は、悪戯いたづらつぼく聞いてくるレスター様にそう言うのが精一杯だった。

「初々ういっしいな……」

何が!?

この方は一体何をしに来たのですか!?

あの雨の中、どんよりと眉間にシワを寄せて佇たずんでいたレスター様はどこに!?

そして、私の初の金貨一枚は!?

いたたまれなくなり思わず早足で歩くが、レスター様も私の歩幅に合わせて離れてくれない！足の長さの違いか!?

私の借りている部屋という名の物置小屋につく頃には、私はハアハアと息づかいも荒く、レスター様は涼しい顔のままだった。

その素敵なお顔をぐるりと回して部屋を眺めると、だんだんと笑顔だった表情が曇くもっていく。

「……ここに住んでいるのか？」

「そうです」

ボロくてすみません。

元々は物置小屋です。今も物置小屋にしか見えませんが。

ベッドだって、脚が折れて使えなくなったのを貰ったやつだ。新品のベッドなんか買えませんが、折れた脚の代わりに要らなくなった本で支えているような壊れかけの家具しかないこの部屋に、レスター様はびっくりしている。

持ち物すべてを持って行こうかとレスター様に言われたが、荷物はほとんどない。必要なものは聖女の服二枚に、お出掛け用の服一枚だけだ。それらを、慌ててまとめて手近な袋に入れた。

大体、仕事に出向くだけなら部屋の荷物を全部なんて要らないと思う。というかそもそも本当に荷物自体がないし。

それに、このベッドを持ち運ぶ勇氣はない。廃品回収に出される自信がある。

レスター様も、さすがに家具を運び出すつもりはないようですよと安心した。

「家具類はこちらで準備しよう。荷物を貸しなさい」

「……あの……仕事をしに行くだけですよね？」

「仕事も頼むが……君を連れて帰りたい」

「はあ……」

聖女の仕事のために一時的に連れて帰りたいってことですよね？

そうですね？

訳もわからずにじつとレスター様を見上げると、レスター様は目を細めてまた少し笑みを見せた。ほんの少し、彼の目の下が紅潮している。

「昼食も予約してある。さあ行こうか？」

「は、はい」

昼食の予約って何でしょうか？

レスター様の台詞すべてが私にはしっくりこない。どことなく食い違っているような違和感を覚えるが、NOと言えない平民孤児の私は流されるしかない。

彼は、私の服の入った荷物を抱え、また私の腰に手を回して歩き出した。

ちらりと横に視線をずらすと、彼の細くて筋張った男らしい長い指にドキリとする。

状況を理解しきれないままレスター様に連れて行かれる。裏庭から教会の正門に戻ると神父様や聖女たちが立ったまま待っていた。

顔につられたであろう聖女たちだけでなく神父様まで見送りなんて、やはりレスター様はかなり身分が高い方なのではと勘ぐってしまう。

「教会の外までの見送りはいい」

淡々とそう告げるレスター様に、あの雨の日も見送りを断ったのだろうと察した。

だから教会の前で一人、無一文で佇んでいたんだと。あの時のレスター様は、本当に暗い雰囲気だった。空気すらも淀んで見えたのだから。しみじみとそう思い出す。

「ではミユスは貰い受けるぞ。何か問題があればヴォルフガングに來い」

「はい！」

神父様……良いお返事ですね。

そんな元気な返事は初めて聞きましたよ。

そして、貰い受けるとはなんですか？

「レスター様。私は仕事で行くんですよね？」

説明も何も聞いていない私は、再度確認するようにレスター様に尋ねた。

「君のためにレストランを予約している。さあ行こうか」

仕事は？ 微妙に返事がかみ合っていない。

教会から早く出たいのか、レストランに早く行くというレスター様。その彼に連れられる私を、教会の聖女たちは睨^{にら}んでいる。

でも私……何もしてないのですけど。その視線はちょっと怖いけど、今は恐怖よりも困惑が勝っている。

私の疑問をよそに、レスター様は準備していた馬車に私を乗せる。そのままガラガラと馬車は出発してしまった。

「どうした？」

「……いえ……」

馬車の中で隣に座り、にこにこ私を見つめるレスター様と、こんな立派な馬車に乗るのが初めてで緊張でガチガチの私。温度差が激しく、さらに落ち着かない気持ちになる。

そもそもなぜここに居るのがわからない。さっきまでいつも通りの仕事をしていたのに……

馬車内の座面は革張りで座り心地が良く、お尻も痛くない。さすが、お貴族様の馬車。

街の外に結界を張りに行く時に使う馬車の座面は木製で、長く乗るとお尻が痛くなっていた。こんな立派すぎる馬車に乗る日が来るなんて、思ったこともなかった。

「ミュスカ。礼を言うのが遅くなったが、この間は傘と金貨をありがとう。とても助かった」

「いえ、お役に立てたなら……」

初めての豪華な馬車に落ち着かない私に、レスター様は丁寧にそう言ってくれた。

……ちよつとびつくりした。

まさかお貴族様が私なんかにお礼を言うなんて思わなかったから。

「どうしたんだ？ ミュスカ」

「……い、いえ。お礼を言われるとは思わなかったの……」

「どうしてだ？ 俺はあの日、ミュスカのおかげで濡れずに帰ることができた。とても感謝しているよ」

「どういたしまして……」

その整った顔で見つめられるとなんだか怪しい。

こんなイケメン貴族様が私に本気でお礼を言うのかしら。

しかも、レスター様は恥ずかし気もなくじつと目を合わせてくるので、照れてしまう。

「……あの、レスター様。お仕事の依頼でいらしたんですね？ なんのご依頼ですか？」

「仕事については邸についてから話そう。どのみち、明日からになるからな」

「お邸って……」

「俺の邸だ。雪の街スノーブルグを知っているか？ そこに邸があるんだ」

すつごく遠いんですけどー!?

まさか、仕事と偽って孤児の私を売る気じゃないですよね！

聖女という付加価値があっても誰も捜さないような平民の孤児だから、どっかの変態貴族とかに売る気ではないですよね!?

もしくは変な商人とかに売られたらどうでしょう！

なんだか怖くなってきた……!

馬車の窓枠に手をかけてずりずりと体をずらし、少しでもレスター様から距離を取ろうと窓にぴったりと寄る。

すると、レスター様は私を窓と彼の間に挟むように手を伸ばしてきた。これでは逃げられない。余りの近さに思わず「ヒッ!」と悲鳴が出てしまい、動悸もする。

「どうしたんだ? まだ街中だから窓の外は珍しくないと思うが……」

「……す、少し離れて下さい!」

窓にしがみつき、赤くなったままそう言うのが精一杯だった。

「……男に慣れてないんだな……。良かった……」

ポツリとレスター様が何か呟いたが、自分の心臓のほうがバクバクして気になってしまい、彼の声は聞きとれなかった。

「あの……?」

「……俺が意外と狹量きょうりょうな男だったということだ」

聞き返そうと少しだけ振り向くと、私の髪を撫でながらレスター様はそう言った。

そして思う。

何の話!?

「ミユスカ、邸までは長い。先ほど伝えた通り、レストランを予約してあるんだ。食事をしてから行こう」

レスター様が行くようなレストランで私が食事できるのかしら?

食べ方とか、決まりがあるんじゃないのかしら。そんなの全く知らないんですけど!?

「ふ、普通の食堂とかですよね!」

「食堂かな? 個室を予約するように手配したのだが……」

それは、絶対私なんかが入れないレストランですよね!

「……私……マナーが……」

レストランに入る前から不安になり、大きな心の声とは裏腹に声が小さくなってしまった。

「……ミユスカはいつも何を食べているんだ?」

「残り物のパンとか……」

だって、少ないお給料から必死でお金を貯めていたから、とにかく食費を削りたかったのだ。パンは残り物としていただけることが多く、毎日の私の主食だった。

「そうか……君との初めての食事だ。楽しいものになりたい。マナーは気にしなくて大丈夫だから」
「は、はいっ」

そして、レストランの前に馬車が止まり、レスター様がなぜか私の手を引いて降ろしてくれた。もちろんエスコートなんてされたことのない私には、それもしつくりと来ない。

「ミユスカ、少し待っていてくれ」

「はい」

なんで私は、ここに立っているんだろう?

凄くお洒落^{しゃれ}で、貴族しか入れないだろう豪華なつくりのレストランの外観を眺めていたら、レスター様が馬車の扉を開けた従者に何かを話しているのが聞こえた。

耳を澄ますと、微かに「メニューを……」と聞きとれたが、話の中身まではわからなかった。予約の確認でもしていたのだろうか？

話が終わって戻ってきたレスター様は、また私の腰に手を回す。その体勢のまま、レストランの中に連れて行かれた。

中に入って個室に案内されると、椅子を自然に引かれて座らされる。流れるような動きで、断る隙がなかった。でも、椅子を始め、部屋の中のものが高級過ぎて落ち着かない。

職人の手作りだろうガラスの花瓶に薄桃色と白の花が飾られており、調度品には細かな装飾が施されている。壁には有名な方の絵画だろうと思えるものである。部屋の真ん中には、ラウンドテーブルに、染み一つない真っ白なテーブルクロス。その上に並べられた白い陶器のお皿に、レストランのスタッフがミートパイを綺麗^{きれい}に載せた。

さらに、パイの横のサラダにはチーズを削りながら振りかけている。

見るからに美味しそうで、目が輝いてしまう。

「ミユスカ、さあ食べようか。他にも好きなもの、食べたいものがあれば何でも言ってくれ」

レスター様は、にこりと笑顔でそう言うのと、添えられていた紙でパイを包み、手に持ってかじりついた。こう食べるんだよ、とまるで教えてくれているみたいに思える。

レスター様を真似するように、私も紙でパイを包んでかじりついた。

こんな高そうなレストランだから、複数のナイフとフォークを使うような料理が出てくるかと思ったが、このメニューでちよつとホツとしてしまった。

温かくて、さっくりしていて美味しい。パイの中のミートソースも具がたくさんで食べ応えがあった。

サラダの野菜もフォークを刺すときしゃきしゃきと音になるほど、新鮮そのもの。振りかけられたチーズとドレッシングの相性がとても良く、こんなに美味しいサラダは初めてだった。思わず頬が紅潮^{こうしほ}する。

「ミユスカ、美味しいか？」

「はい。凄く美味しいです……！」

「それは良かった……」

私の返事に、レスター様はホツとして満足そうな顔をする。どうしてこんなに優しくしてくれるのかわからないけど、私も美味しい食事と彼の優しい雰囲気につられて笑顔になってしまう。

手づかみで食べられる食事。これが貴族の食事とは違うことには薄々気がついている。

彼の気遣いに、周りの空気まで柔らかく感じる。こんなに心が温まる食事は初めてで、胸にジワリと感動が湧き起こる。

「レスター様……お食事、ありがとうございました」

レスター様はよくわからない方だけど、ご馳走になったんだからと、緊張しながらもお礼を言った。

「君には感謝してもしきれない。礼を言うのは俺の方だ」

「……もしかして、お食事は金貨のお礼ですか？」

「礼というほどではないが……君には何でもしてやりたい」

「はあ……」

凄く豪華なお礼でしたけど……。私には、一生に一度のことだと思う。

食後にはデザートまで出てきて、フルーツいっぱいケーキに涙が出そうだった。最低限の食事しかしていなかった私は、人生で初めてお腹がいっぱいになった。

食事を終えると、馬車がレストラン前で待機していて、いったいいつ連絡をしたのだろうと呆気に取られている間に、またもエスコートされてしまった。

レスター様は私に手を差し出すと、「さあ」と手を添えることを促す。

従わないといけない雰囲気を感じ、びくびくしながら差し出された彼の手のひらにそつと手を乗せる。

私がエスコートに応えたのを見て、愛おしそうな表情を見せるレスター様。お貴族様の考えていることはさっぱりわからないが、私も緊張からくる動悸で気が動転していることは間違いない。

馬車に乗り込むと、レスター様はレストランに行く前同様になぜか向かいの席ではなくて隣に座った。端正な顔をこちらに向け、何事もないように話しかけてくる。

「先日、聖女を求めてコンスタンの街に向かった時は、街道に雪が降り積もっていたからディーゲルを通って来たんだ。でも、今日は不思議と雪が落ちて着いているし、街を通らずに一気にスノーブ

ルグへ向かおうと思っている。どこにも連れて行けなくて申し訳ない」

コンスタンとスノーブルグの街の間には、山間の街ディーゲルがある。

基本的にはその街を通過してスノーブルグへ行くのが一般的だが、雪が落ち着いている時だけ通れる街道がある。それを使うとディーゲルを通過しなくてもコンスタンからスノーブルグへ抜けられて、かなりの時間が短縮できる。それでも、馬車で半日以上はかかるけど。

「大丈夫です。お仕事ですから。馬車に長く揺られることは慣れてます」

魔除けの結界を張りに行ったり、市民からの依頼で聖堂騎士団と魔物討伐に行ったりすることが過去にもあった。馬車の旅に慣れていない訳ではない。慣れていないのは、この豪華すぎる馬車だ。

しかも、馬車の中は二人だけで、真横にレスター様がいる。離れる気配はない。緊張する。

「ミユスカ。ここには俺たち二人だけだ。まだ先は長いし、力を抜いてくれないか？」

「そ、そうですか……」

緊張しっぱなしの私にレスター様が、柔らかい口調で言う。

できるかぎり窓辺に体を寄せてレスター様と間合いを取ろうとしている私に、「困ったな」と呟きながらも彼は楽しそうだ。

そして、ほんの少しだけ離れてくれた。優しい。

そんな様子で馬車は何事もなく進み、スノーブルグへ向けて街道をひたすら走っていた。

時おり粉雪が舞ったが、街道に降り積もるほどではなく、馬車の車輪が雪に取られることはなかった。

「順調に進んでいるな。ミユスカに『聖女の加護』を付与してもらった日も、こんな風になんの問題もなく帰れたんだ」

「ご無事で良かったです。実は心配していました」

あの日は、レスター様が余りにどんよりしているから、このまま行き倒れになるんじゃないかと本当に心配した。

「君は本当に優しいな……ミユスカに会えてよかった」

彼は、私が心配して加護を付与したことに感無量のようだ。加護をこんなにも喜んでくれる方は初めてで、私まで柔らかい気持ちになる。

すると、レスター様は向かいの座席を持ち上げて、その中からなにかを取り出した。出てきたのは、あの初めて買った傘だ。

「これも返さないと……と思って大事にしていたんだ」

小銭を金貨に換えたときに余ったお金で買った、お貴族様からすればどうでもいいような平凡な傘なのに、レスター様はそれを大事にしまっておいてくれた。傘を返してもらったことも嬉しいけど、彼の気持ちが嬉しかった。

「あ、ありがとうございます」

傘を両手で抱きしめるようにしてお礼を言った。思わず微笑むと、レスター様も笑顔を返してくれた。

「でも、馬車が揺れた時にぶつかっては危ないから、またここにしまっておいてもいいか？」

「はい。よろしくお願いします」

ほんの少し再会した傘をまたレスター様に渡すと、彼は丁寧に座席の下に片付けた。

平民の私に優しいなあと思って心が温かくなると同時に、だんだんうとうとしてきた。レスター様が優しく、馬車の中が教会にいた時みたいに心地悪く空気がなかったからかもしれない。こんな穏やかな空気は初めてだったのだ。

何度か休憩をはさんだが、その間も温かいお茶を出してくれたり、ブランケットをかけてくれたりと至れり^{いた}尽くせりだった。

順調な移動に、優しい空間。

うっとり私を見つめるレスター様の意図はわからないから、見なかったことにして、気がつけば私は穏やかな馬車の中で瞼^{まぶた}を閉じてしまっていた。

◇

「ミユスカがまだ眠っている。暖かい毛布を持って来てくれ」

「かしこまりました」

男性がレスター様にそう返事をした。

「ミユスカの部屋は暖めているか？」

「はい、温かいお茶もすぐに出せますよ」

今度は女性の声でした。

少し寒さを感じてる中、そんな会話がだんだんと聞こえて来ていた。目を覚ますといつの間にかレスター様の膝に頭を乗せて眠っていたことに気付き、はつとする。

いつの間に!?

怒られると思い、慌てて頭を上げてすぐさまレスター様に謝った。

「す、すみません！ 私……！」

どうしよう、と軽くパニックになるが、レスター様は全く怒ることなく頭を撫でてくれた。

「ミユスカ……落ち着いて」

「でも、私……寝てしまつて……レスター様に失礼を……」

無礼者、と怒られると思い、焦りで頭がいつぱいになる。どう謝罪すればいいだろうと必死に考えを巡らせるが、まとまらない。

それなのに、レスター様は嫌な顔一つせずに優しく接してくれる。

「失礼なことなんてしていないから大丈夫だ。……泣くほど疲れていたのか？」

「な、泣いてません……！」

あまりの優しい反応に、目の縁に少し涙がたまつてしまつていたようだ。それを急いで拭^{ぬぐ}う。

寝ていた私の身体には、ひざ掛けにしていたはずのブランケットが肩まで覆うように掛けられており、レスター様が私を気遣つてくれたのがわかる。

それでも、馬車の開いた扉からの冷氣に「くしゅん」とくしゃみが出た。

「スノーブルグの街は特別寒いんだ。これを羽織りなさい」

レスター様が自分の上着を差し出してくれた。

「でも、レスター様が……」

「ミユスカの方が大事だ。風邪を引かせるわけにはいかない」

私のほうが大事とかなんとか、幻聴が聞こえた気がする。

まだハッキリと目が覚めていないのだろうか。

レスター様にコートをかけられ、しかもまた腰に手を添えられて馬車を降ろされると、こんなに良くしてもらえるなんて、やつぱり夢かなあと思う。

でも、すぐに違ふと実感した。眠っているとは思えないほど寒かったのだ。私がいた教会のあるコンスタンの街も夜は冷えるけど、そんなものじゃない。空気が本当に冷たくて、肌に刺さるようだ。思わず身体がぶるつと震えた。

コンスタンを出たのは朝早かったけれど、いつの間にかもう夜になっていて、真つ暗だ。玄関と馬車の灯りの中、呆然と空を見上げると、しんと雪が降っている。少ない灯りの中だからだろうか、舞い落ちる雪がとても綺麗^{きれい}に見えた。

「レスター様！ 毛布です！」

邸の使用人の方が走つて毛布を持って来た。レスター様はそれを受け取ると、私に「寒かっただろう」とかけてくれた。

「レスター様は？」

「ミウスカは優しいな……俺のことは気にしないでいい」
優しいのはレスター様だと思う。

こんな平民の最低限の生活すらできていない貧乏聖女に優しくするなんて不思議だ。
そして、このお城はなんですか!?

邸と聞いていましたが、この大きさはもはやお城なんですけど!?

やっぱり私、売られる!? 明日にはこれが仕事だとかなんとか言って売る気じゃないですよね!
私が入っていいような邸じゃないんですけど……!

「ここはどこですか!?

」俺の邸だ。今日から一緒に住もう」

「……………はい?」

「君には金貨の礼をしたい。今日からミウスカもこの邸に住んでくれ。部屋も準備している」
お城みたいな邸の前でレスター様に肩を抱かれて、寒さとは別に私は思考が止まってしまふ。
今なんて言いました!? 一緒に住もう!?

このお城みたいな大豪邸に!?

まさか金貨一枚の、そして傘を貸したお礼がこの大豪邸に住むこと!?

金貨一枚で借りられるような部屋じゃないですよね!?

そして、仕事はどうになりましたか!?

「あの……レスター様、仕事の間だけですよね?」

おそろおそろ聞いてみる。

「聖女の仕事でお願いしたいこともあるのは確かだが、それとは別にミウスカにはここにずっと住んで欲しい」

「いつまでですか!?

」ずっとかな」

ずっとって何!?

無期限契約なんてしましたかね?

確かに、教会で私を「貰い受けるぞ」とか言っていましたけれども!
ハッ!?

この優しいレスター様が、私にまさかの愛人希望をしてきたってことですか!?

聖女を欲しがる貴族は確かにいますけども!

「レ、レスター様……私……愛人はできません!」

「何の話だ? 俺は独り者だが……」

何の話かわからなかったようで、レスター様は無表情のまま不思議そうに首を傾げた。

「だって、ここに住めって……」

愛人として私を囲うつもりでは!?

「金貨の礼にこの邸で好きに過ごしてくれたらいいんだが……」

「金貨一枚でこんな大豪邸に住めるなんておかしいです!」

怖い！ 裏があるのではと怖くなる。

「この邸が気に入らないなら、ミユスカが好きな邸を準備しよう。俺が持っている邸で気に入るものがないなら、好きな邸を買ってやろう」

「か、買う!?」

目眩^{めまい}がしそう！

視界がグルグルします！

あまりの発言に足元がおぼつかなくなりフラリとするが、レスター様が肩に手を回しているために倒れることはなかった。いや、できなかったが正しい。

ふらついた私を見て、レスター様の様子がおかしくなる。いや、人命救助のつもりかもしれないけど……！

「ミユスカ!? 大丈夫か!? 大変だ！ すぐに部屋に行こう！」

倒れそうな私をレスター様はいきなり横抱きに抱えて、早歩きで邸の中をずんずん進んで行った。

「レスター様……っ、ちょっと待って下さい！」

「ミユスカに何かあつては大変だ！」

ひいー!?

行動力についていけない！

毛足の長い絨毯^{じゅうたん}が敷かれ、調度品も立派な廊下を通る。

連れて行かれた部屋には、品が良く、落着いた印象のいかにも高級そうな家具。火がパチパチ

と燃えている暖炉。あらかじめこの部屋の住民のために火を入れていたのだろうとわかるくらい、部屋は暖められている。

その部屋のベッドに私を優しく降ろすと、レスター様は後ろからついて来ていた執事らしい使用人さんに指示を出した。

「アラン！ すぐに医者を呼べ！」

「かしこまりました！」

「ちよつと待ってー！」

「医者つて何!? かしこまらないでー!?」

「ミユスカ、大丈夫か？ やはり疲れているのだろう……」

そりや毎日毎日、聖女の仕事で疲れてはいる。他の聖女たちに仕事を押しつけられてもお給料は

変わらないし……でも、そういうことではない！

「かわいそうに……」と言いたげな切ない瞳で私を見るレスター様は心痛しているようだ。

そんな瞳を向けられている私はいえ、この抱きかかえられた体勢に困惑と羞恥^{しゅうち}と……色んな

感情で目がさらに回る。

「レスター様！ お医者様はいいです！」

「しかし……ミユスカに何かあれば……」

「何もありません……っ！」

混乱しきつてとにかく拒否しなければと慌てる私を見て、レスター様はアランと呼んだ執事らし

い方を下げさせた。

私と目線を合わせるように膝を折り、「どうした？」と優しく聞いてきた。

整ったお顔が目の前に近付き、また訳がわからなくなる。

それでも、頑張つてこの状況はおかしいと思うことをレスター様に話した。

「わ、私がお渡ししたのは、金貨一枚だけです。お礼としてこのお邸に住むというのは金貨一枚の価値を超えていると思うんです！」

「そうか？」

そうに決まっています！

私の方がおかしいことを言っているような気になるくらい、レスター様は不思議そうな表情をする。

「ふむ」とほんの少しだけ考えると、急に立ち上がってテーブルの上の宝箱みたいな小箱を手に取り、私に差し出してきた。

本当なら、こんなきれいな小箱を差し出されたらワクワクするのかもしれないが、今の私にはワクワクは全くない！

次は何が出てくるのか、むしろちょっと怖いくらいだ。

「これをミユスカに……」

気にせずに話を進めるレスター様は私の前に跪くと、パカリと小箱を開いた。中には金貨がぎっしりと詰まっている。

レスター様も眩しいけど、金貨も眩しい！

あまりのことに思わずくらりとしてしまい、座っているベッドにそのままぱたりと倒れた。

「ミユスカ!? どうしたんだ!？」

ああ、どうしてこんなことになっているのでしょうか？

今日は、いつも通り朝早くから冷たい水で身体を拭き、通いの聖女たちが来るまで癒しを求める方々の対応をした。

通いの聖女たちが来たら、アミュレットに『聖女の加護』を付けて（押しつけられたノルマの分まで）、掃除をするはずだった。

なのに、いきなり神父様に呼び出され、レスター様にお会いした。馬車に乗せられ、美味しい食事をいただき……そしてレスター様の大豪邸に連れてこられた。

目の前にはなぜか私に跪く彼。そして、先日お渡しした金貨一枚どころか沢山の金貨が詰まった小箱。

なぜ……!?

「ミユスカ!? やはり体調が悪いのか!? こんなに痩せているし、栄養失調か!？」

レスター様はベッドに倒れた私の左右に両手をつき、上から覆い被さるように覗き込んだ。

襲われる!? と一瞬びつくりしたけれど、レスター様は焦りながらも私のことを心配してくれているようだ。

栄養は確かに足りていないだろうけど、そんなに心配してもらうほどではないと思う。

いつも残り物のパンを食べているし、癒しをかけたお礼にとこっそりリングを買って食べたこともある。まったく食べていないわけではないから。

そんなことを考えるよりも、この体勢をどうしていいのかわからない！

「レ、レスター様……体調は大丈夫です！　ですから……」

「本当か!?」

「本当です！」

力いっぱいそう返事をした。

レスター様の視線から逃れるため、ベッドの上で横を向いて丸くなる。

教会では、風邪を引いた時でさえ私のことを心配した人はいなかった。せいぜい他の聖女たちが私にノルマを押し付けられないのを残念がっただけだ。

なのに、ほぼ初対面のレスター様が、ちよつとふらつただけでこんなに心配してくれるとは……

しかし……！

「レ、レスター様！　少し離れませんか？」

お貴族様に意見するなんて、と怒られてもいい！　この距離でお話は私にはできない！

「離れたくないんだが……」

ポツリと呟くレスター様だが、なんとか離れてくれた。

心配している風だったし、私みたいな貧相な平民を襲う気なんて最初からなかったとは思っ

ど……距離感がわからなくて戸惑いしかない。

「……隣には座ってくれるか？」

「は、はい！」

レスター様の隣もおそれ多いけど、上から覆い被さられるよりはいいはず。

そのまま二人でソファアに移り、やつとゆっくり話を始めることができた。

「とりあえず、金貨は一枚でお許し下さい。私がお渡ししたのは一枚だけです……」

「しかし、礼をしたいのだが……」

本当に許して下さい！　金貨ぎつしりなんて眩しすぎます！

思わず拳に力が入る。

レスター様は納得できないようで葛藤を見せたが、私を困らせたくない気持ちのほうが勝ったみたいだった。ため息をつきながらもようやく金貨ぎつしりの小箱を下げてくれた。

「ミユスカ、手を出してくれ」

とりあえずは小箱を下げてくれたから、と素直に両手を出すと、レスター様は私の手をそつと握り、金貨を三枚チャリンと手のひらに載せた。

「レスター様……あの……」

「ひとまず、金貨を返したい。ミユスカ、先日は本当にありがとう」

結局多く返ってきてしまったが、金貨三枚なら小箱ぎつしりよりはまだましだと自分に言い聞かせ、拒否することなく受け取る。

やっと金貨が返ってきたことを嬉しく思い、レスター様にお礼を言った。

「レスター様、ありがとうございます。全財産だったので……」

思わず噛み締めるように言葉がこぼれ、口元が綻んだ。

「君は全財産を通りすがりの俺に……？ 本当に悪かった。ミユスカのおかげで助かったんだ」

「お役に立てて良かったです」

レスター様は「本当にありがとうございます」と私の髪をすくように優しく撫でて言った。

見つめられると何だか照れくさくなるほど、レスター様は優しい雰囲気（きも）を醸し出している。そもそも、私なんか近付いてはいけないくらい素敵な容姿をしていらつしやる。

そんな人に撫でられている照れくさを隠すように、仕事の話を振った。

「レ、レスター様、聖女に頼みたいお仕事とは？」

「聖女の『豊穰の祈り』が欲しい。最近作物の出来が悪く、飢饉に陥る前に聖女に来てほしかったんだ」

「それなら大丈夫です。私でも『豊穰の祈り』はできます。明日にでもすぐにしますね」

「助かるよ。もし疲れているなら日にちはずらしてもかまわないが……」

「大丈夫ですよ。明日やってしましましょう」

「では、お願いしよう」

やっと仕事の内容を聞けたし、レスター様も大人しくなった。そのことにホッとする。

隣で見つめられるのはちょっと気になるけど……

初めて会ったときは、どんよりとして暗い印象を抱いた灰色の瞳。今は優しさを湛えて私を真っすぐに見てくるから、なんだかドキドキしてきた。

お邸や金貨に焦っていた時の動悸とは違う、胸が温くなるようなときめきをほのかに感じた。

レスター様とお互い無言で、でも心が通じ合っているかのような心地良い沈黙の中で見つめ合っていたその時。

コンコン――

扉からノックの音がした。

「レスター様、お食事の準備が整いました」

ちよつといい雰囲気の中、扉の向こうから使用人の方の呼び掛けが聞こえる。

レスター様に目を奪われ、ほんの少しときめいてしまっていたせいか、扉越しとはいえ急に呼び掛けられてビクツとしてしまう。彼は私と違い動揺すら見せない。

「ミユスカ、お腹が空いただろう。サロンに食事を準備させている。一緒に食べよう」

「はい」

こんな深夜に食事を出してくれるなんて凄い。

そして、当然のようにまた腰に手を回されてサロンに連れて行かれると、美味しそうなリゾットやチーズにハムに……と豪華な食事が所せましと並べられていた。

「もう遅い時間だから軽めの夜食にしたらどうか……足りるだろうか？」

これが夜食!?

私にとつては煌びやかなご馳走ですけど……

普段、レスター様は何を食べているのだろうか？

平民、しかもその中でも貧しい生活をしている私と貴族のレスター様とでは、生活のレベルが違い過ぎる。

やはり、この邸に住むのは無理だと思う。私には不釣り合いだ。

そう思うと表情が曇り、顔を上げられない。

しかも、夜食といひながら給仕さんまでいて、お茶一つ自分で淹れることもない。

「お嬢様、お茶をどうぞ」

「あ、ありがとうございます……」

私は全くお嬢様ではないけど、使用人の方も丁寧に接してくれる。

「ミユスカ。彼は、執事長のアランだ。給仕や使用人のことなど、邸内を取りまとめている。困ったことがあればなんでも相談するといい」

「し、執事……」

執事なんて初めて見た。

「お嬢様、よろしくお願いいたします。どうぞアランとお呼びください」

年配のアランさんは、長年ヴォルフガング辺境伯邸に仕えている執事らしい。厳しそうな顔だけど雰囲気は優しく、穏やかな感じにみえた。

アランさんの後ろには下僕もおり、彼ら二人も私に一礼する。

「は、はい！ よ、よろしく願いますっ！」

使用人とはいえ、こんな大豪邸に仕えている彼らは貧乏聖女の私よりもいい生活をしていると思う。私は貴族の聖女たちと違って自分で聖女の衣装を用意できないから、教会から支給された粗末な聖女の服を着ているのに……

お洒落どころか身だしなみを整えることすらままならない私と違って、彼らはとても清潔で綺麗だ。

そんな彼らに頭を下げられて、私は慌てて立ち上がり頭をこれでもかというくらい下げた。

「ミユスカ。座ったままで大丈夫だ。さあ、座ってくれ」

立ち上がった私にレスター様も立ち上がり、恐縮している私の側に来て椅子に座るよう促した。おそるおそる座ると、彼も席に戻る。

「お嬢様。お砂糖はいかがですか？」

「だ、大丈夫ですっ」

アランさんが、ビクビクする私に優しく勧めてくれた。

凄く気を遣ってくれている気がする。緊張してしまい慌ててお茶を飲んだ。

レスター様は、上品に音もなくお茶を飲んでいる。

「ミユスカ、今湯浴みの準備もさせているから、部屋に帰ったらゆっくり休みなさい」

「湯浴み……？ 部屋？」

「ミユスカの部屋にも浴室はあるから、ゆっくりお湯に浸かれるぞ」

「へ、部屋にお風呂があるんですか？」

部屋にお風呂があるなんて凄い！

「メイド二人に湯浴みを手伝わせるからゆっくり寝支度をするといい」

「ひ、一人で大丈夫です！」

湯浴みを手伝うって何でしょうか？

レスター様は、アタフタとした私を見てクスツと少し笑う。

アランさんは、そんなレスター様になんとか少し嬉しそうだ。

美味しい食事を終えた後、あの豪華な部屋にまた連れて行かれた。さすがに湯浴みまではついて来なかったレスター様は、「ゆっくり休んでくれ」と言って部屋を後にした。

本当にお部屋に備え付けられていた浴室では、メイドさんたちが湯浴みの準備をしてくれている。

「お嬢様。さあ、どうぞ」

「は、はいっ」

若いメイドさんが、丁寧に私の服に手をかける。すると脱がされ、腕や肩が露わになると少しだけ彼女の手が止まってしまった。貧相な身体だから、驚いたのだろうか。

これ以上、人に服を脱がされるのはさすがに恥ずかしい。

裸でお世話をされることなんて初めてで、緊張と羞恥でいっぱいだ。

「あ、あの、一人で大丈夫です！ その……ゆっくりと入りたいので……」

どうか許してください。私は貴族ではないのです。という願いを込めて言った。

「はい。わかりました。お疲れですよね。どうぞゆっくりなさってください」

恥ずかしさであたふたする私に氣遣ってくれたメイドさんたちは、朗らかな笑顔で去っていった。それでもタオルや石鹸など、何もかもが私が困らないように準備されていて、その優しさに胸がジンとくる。

遠いコンスタンの街からスノーブルグに半日以上かけてきたから、長旅で疲れているのだと勘違いされた気もするけど、今はその勘違いがありがたい。

いくらそれが彼女たちの仕事とはいえ、初対面の人にいきなり全裸を見せることには抵抗があるのだ。

自分で服を脱いで、いい匂いのする石鹸を泡立てて身体を洗った。

こんな石鹸は初めてで、本当に使っているのか不安になるけど、同時に感動もしている。

浴槽に浸かると、お湯からいい匂いがした。こんな贅沢なお風呂は初めてで、温かいお湯に身体がホッとしながらも、戸惑いが隠せない。でもごゆっくりと言われたし、せっかくだからしっかり温まろう。

ゆっくりと堪能した湯浴みは、冷えた身体を十分に癒してくれた。温まり、「いざ寝ましょう」と部屋を見渡すと身体は固まる。

この豪華な部屋にベッド。私はどこで寝ると!?

天蓋付きの薄いレースの垂れ下がったベッド。こんなもの、触ったことはもちろん見たこともない。

このベッドで眠ることが恐ろしい。もし汚したら、私は一生かかっても弁償なんかできない。そもそも私はこんなので眠れる身分じゃない！

視線を下に移すと、床の絨毯には汚れ一つない。ここで寝ても大丈夫だろう。どう考えても、元・物置小屋だった私の部屋のほうが汚い。あの物置小屋のベッドよりも、この絨毯のほうがはるかに綺麗だ。

そう考えて、ベッドの足元にかかっていた毛布を取り、そのまま包まって床に転がった。

◇

「ミュスカ!? どうしたんだ!? ミュスカ!」

どれくらいだっただろうか。

暖かい部屋で眠っていると、私の名前を叫ぶレスター様の声が聞こえた。その声でうつすらと目を開き、体を起こそうとするが、自分で起こすよりも早くレスター様に支えるように身体を起こされた。

「ひゃっ……! レ、レスター様!? あの……どうされました……?」

急に身体を起こされて驚き、変な悲鳴が出た。

レスター様はまるで緊急事態に直面しているような様子だった。

「ミュスカの方こそどうしたんだ!? なぜ床に!」

「私は、寝ようと思ひまして……」

いや、すでに寝ていましたけど……

私がキョトンとして返した言葉に呆然とするレスター様。なぜかその後ろにいる女性の使用人の方も水差しを持ったまま哑然としていた。

二人してそんな反応をされると、何か私はおかしなことを言ったのかと不安になってしまふ。

「ミュスカ……っ」

レスター様が、奥歯を噛み締めるようにうめきながら抱き締めてきた。

「ひっ……! レ、レスター様!? あの……っ!」

離れて欲しい!

慌てふためく私をよそに、レスター様は私を抱き締めたまま女性の使用人の方に「下がってくれ」と言った。

レスター様、距離がちよつと近すぎですよ!

女性の使用人さんが退出するとレスター様はやつと私を放してくれた。

「ミュスカ……」

「はい……」

お互いに床に座ったまま向かい合う。レスター様は、多分言葉を選んでいるのだろう。